



寺田寅彦の周辺

太田文平

寺田寅彦の周辺

太田文平

日本放送出版協会

寺田寅彦の周辺

検印廃止

昭和五十年六月十日 第一刷発行

著者 太田 文平

発行者 浅沼 博

印刷 三和印刷

製本 石津製本

装幀 荒田秀也

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町四一―一

郵便番号 一五〇

振替 東京四九七〇一

寺田寅彦の周辺

目次

漱石渡英前後と寅彦	7
漱石の作品に現われた寅彦	10
子規と漱石と寅彦	16
師と弟子との間柄	19
第三者と当事者	28
点をもらう	33
寺田寅彦と安倍能成	38
「安倍能成の初恋」後日物語	44
寺田夏子覚え書	50
「寺田夏子覚え書」始末記	74
安倍能成先生の追憶	78

寺田寅彦と小宮豊隆

90

「東上記」考始末記

96

寺田寅彦あての小宮豊隆の書簡

102

小宮豊隆先生の追憶

110

人間形成と師弟相伝

127

札幌・寅彦・宇吉郎

133

天災は忘れたころ来る

139

「天災は忘れたころ来る」考

145

「I 駅の一晩」のこと

150

中谷宇吉郎博士の追憶

157

茂吉と寅彦のこと

169

辰野隆先生のことども

172

高嶺俊夫博士の追憶

177

平田森三先生の思い出

188

平板な野の森陰の小屋 194

土佐と遠江 200

幼少時の寅彦と名古屋 205

関東大震災と寺田寅彦 209

「藪柑子」考 214

「花物語」・「龍舌蘭」・「球根」

223 217

「寅彦のゴムの木考」始末記

高知随感 229

「花物語」と「春六題」 233

「栗の花」始末記 238

生きている寅彦 244

「日本の春は太平洋から来る」考

247

重兵衛さんの一家 251

寺田寅彦と「亀さん」 254

寺田寅彦の手紙 260

寺田寅彦と絵画	263
寺田正二さんのこと	269
三つの証言	275
寺田寅彦の正月観	280
俗人と俗物	283
「かも知れない」考	286
「百米十秒二の話」始末記	289
小泉八雲と松江旧居	292
漱石と薬屋さんと私	298
高尾さんと私	304
寅彦研究とゆかりの人びと	310
わたしの一冊の本	315
初出誌紙一覧	320
あとがき	323

漱石渡英前後と寅彦

昭和四十一年刊行の岩波版「漱石全集」によると、漱石の日記は、明治三十三年九月八日から始められている。この日は、漱石が「英語研究ノ為メ満二年間英国へ留学ヲ命ズ」という辞令を受けて、横浜を出帆した日であるが、それ以前の日記はない。ところが、幸いなことには「寺田寅彦全集」には、当時の「日記」や「随筆」が収録されているので、このブランクを埋めることができる。これには子規も登場してくるので資料的にも重要性があるように思う。

「子規自筆の根岸地図」によると「その一つは端書で『今朝ハ失敬、今日午後四時頃夏目来訪只今（九時）帰申候。寓居ハ牛込矢来町三番地字中ノ丸丙六〇号』とある。消印は『武蔵東京下谷 三十三 三年七月二十四日ノ便』となっている。これは、夏目先生が英国へ留学を命ぜられた為に熊本を引上げて上京し、奥さんのおさとの中根氏の寓居にひと先づ落着かれたときのことであるらしい。」と書かれている。この点について、矢島祐利氏は「寺田寅彦」の中で、「その朝（七月二十三日）も寅彦は子規を訪ねたであろう。その午後、漱石が子規を訪ねたので、子規は早速漱石の東京の住所を寅彦に知らせてくれたのである。これだけでも子規の頭のはたらきが好く視われ、また子規が寅彦をどのように扱っていたかも知られる」と解説を加えている。

寅彦の「廿四年前」によると「私が大学の一年から二年に移るときの夏休みであった。その年の春から私は西片町に小さな家を借りて、そこに自分の家庭というものを作った。それでいつもはきまっと帰省する暑中休暇をその年はじめて何処へも行かずにずっと東京に暮す事になった」という叙述があり、寅彦が子規をたびたび訪れたことが推定される。このことは、『寺田寅彦全集』の「書簡集」にも「日記」にも出ていないので、実に貴重な資料であるばかりでなく、この明治三十三年春という時期は、寅彦が明治三十年七月に熊本五高在学当時に、妻夏子と結婚して以来、ほぼ三年ぶりで初めて新居を構えることができた時期でもあったのである。

寅彦にとっては、「しばらくの別れを握手に告ぐる妻のびんの後れ毛に風ゆらぎて蚊帳の裾ゆらゆらと秋も早や立つめり」（『東上記』——明治三十二年九月）とか、「秋草には束髪の美人を連想するなど考えながらここを出でたり」（『平日ある記』——明治三十二年九月）というような、はるかに別れ住む妻を恋うやるせない生活に「まず終止符を打つことができたのであって、寅彦の生涯にとって最も楽しかった時期であったと思われる。

明治三十三年八月廿六日の寅彦の「日記」に「漱石師来り共に子規庵を訪う」と記されているが、これが漱石と子規との生前における最後の面会となったのであり、寅彦にとっても忘れ得ない印象となったと推定される。その証左として、昭和六年八月十三日付で、寅彦が避暑先の子供達にあてた手紙の中で、「唯庭一面の雁来紅が燃えるような美しさを日々に展開しています。正岡子規がこれが大好きで、狭い庭の前面にこれを植え並べて動けぬからだを横たえたままに飽かず眺めて来ました。彼の淋しい心にとっては、この鶏頭の赤や黄の交響楽は世界中の美しいものの具体化と思われたことで

しよう」と書き送っているのである。

「漱石全集」の「書簡集明治三十三年」のところに、九月六日付で寅彦あての書簡が出ているが、「小生出発は汽船出発の時刻変更の爲め午前五時四十五分の汽車と相成べくと存候是も正確ならず御見送御無用に候 秋風の一人をふくや海の上」と記されている。漱石の寅彦に対する心づかいがうかがわれるとともに、子規や寅彦と別れて「一人」になる寂寞感が胸をうつのである。寅彦の「日記」をみると、「九月八日漱石師の洋行を横浜埠頭に送る。船名プロイセンブレメン、マルセイユを奏しつつ出港す」とあって、やはり寅彦は漱石を見送っている。そして、昭和七年になって寅彦は「夏目漱石先生の追憶」というすぐれた作品の中のハイライトにこれを再現して「先生が洋行するので横浜へ見送りに行った。船はロイド社のプロイセン号であった。先生は一人少しはなれた舷側にもたれて身動きもしないでじっと波止場を見下していた。船が動き出すと同時に、奥さんが顔にハンケチを当てたのを見た」と書いている。

漱石の渡英後、子規にも寅彦にも運命は苛酷なものであった。子規は約二年後に世を去り、寅彦は妻夏子の発病のために、明治三十四年二月には、西片町の家を閉じて再び別居生活を始めなければならなかった。そして、寅彦も病み、夏子は死去したときも、漱石は未だ英国に留学中であつたのである。

漱石の作品に現われた寅彦

中谷宇吉郎の「寺田寅彦の追憶」の中に、「漱石先生の書かれたもののモデルの詮議などすることは、如何にも意味のないことという気がする」ということばがある。けれども、漱石が寅彦をモデルに用いたのは、また特別の意味があったように思われる。現に寅彦自身も「寒月のモデルなどというものは無い」といつているくらいで、それは好事家のせんさくするような、いわゆるモデル小説に出てくる意味の、単なるモデル問題ではなくて、相互の人生に影響力をもつ契機がひそんでいるからである。

以下、寅彦の随筆の中から、寅彦自身が漱石の作品の材料に使用されていると説明しているもののみを実証的に拾いあげて、この点を探究するためのよすがとしたいと思う。

「自由画稿」の中に、次の一節がある。

——いつか何処かで御馳走になったときに出された吸物の椎茸をかみ切った拍子に、その前歯の一本がぼっきり折れてしまった。夏目漱石先生にその話をしたらひどく喜ばれて、その事件を「吾輩は猫である」の中の材料に使われた。この小説では、前歯の欠けた跡に、空也餅が引っかかっていたことになっているが、その頃先生のお宅の菓子鉢の中にしばしばその餅が収まっていたものらしい。と

にかく、この記事のおかげで、自分の前歯の折れたのが、二七、八歳頃であったことが立派に考証されるのである。立派なものが、つまらぬ事に役立つ一例である。――

漱石の「猫」の中では、このことがとりあげられて、「俳句にはなるかも知れないが恋にはならんようだな」とのべられているが、これが漱石の寅彦観の一端のあらわれであり、かつて漱石が寅彦を評して、「神経質にして仙骨を帯びたるもの」といったと伝えられていることの実証にもなるように思われる。

寅彦の「夏目漱石先生の追憶」の中に、「自分が学校で古いフィロソフィカル・マガジンを見ていたら、レベエレンド・ハウトンという人の『首釣り力学』を論じた珍らしい論文が見付かったので、先生に報告したら、それは面白いから見せろというので、学校から借りてきて用立てた。それが『猫』の寒月君の講演になって現われている」というところがある。

これは「猫」の中にある「首縊りの力学」をめぐる論争の場面になっているのであるが、数式の説明の段になって、「この式を略してしまおうと折角の力学的研究が丸で駄目になるのですが……」「何、そんな遠慮は入らんから、ずんずん略すさ」と苦沙弥先生がいうのであって、このことについては、中谷宇吉郎の前掲書によると「実は一二の連立方程式を解くところで、如何に漱石先生でもこればかりは致し方がなかったであろう」と寅彦が宇吉郎に話した由である。

しかし、寅彦は漱石の科学的素質を認めていなかったのではなくて、「高等学校で数学の得意であった先生は、こういうものを読んでもちゃんと理解するための素質をもっていたのである。文学者には異例であると思う」と書いている。

この漱石の科学的素質が、寅彦の人生を理解するのに大いに役立ったのであらうと考えられ、また科学と文学の融合というテーマもここに背景をもつものではないかという気がするのである。

寅彦の「冬の田園詩」という作品の中に、「後年夏目先生の千駄木時代に自筆絵葉書のやりとりをしていた頃、ふと、この伯母の狸の踊りの話を思い出して、それをもじった絵葉書を先生に送った。ちょうど先生が、『吾輩は猫である』を書いていた時だから、早速これを利用して、作中の人物のいたずら書きと結びつけたのであった」というくだりがある。このことも、漱石と寅彦の別の角度から見た愛情の交流を示す資料と見ることができる。

また、「夏目漱石先生の追憶」の中に、次の一節がある。

——自分の研究をしている実験室を見せろといわれるので、一日学校へ案内して、地下室の実験室装置を見せて詳しい説明をした。その頃は、ちょうど弾丸の飛行している前後の気波をシュリーレン写真に撮ることをやっていた。「これを小説の中へ書くがいいか」といわれるので、それは少し困りますといったら、それなら何か他の実験の話をしろというので、偶然その頃読んでいたニコルスという学者の「光圧の測定」に関する実験の話をした。それをたった一遍聞いただけで、すっかり要領を呑込んで書いたのが「野々宮さん」の実験室の光景である。——

これはいうまでもなく、「三四郎」の中に出てくる「野々宮さん」のことであり、小宮豊隆の「三四郎の材料」と中谷宇吉郎の「光線の圧力の話」に詳細にのべられているところである。

そして、このことから感ぜられるものは、先にのべた漱石の科学的素質と、寅彦に対する信頼感とであり、また寅彦より見れば、「聞いただけで見たことのない実験が、かなりリアルに描かれてい

るのである。これも日本の文学者には珍らしいと思う」ということであり、漱石の本質的な偉大さがわかる。芥川龍之助のことばにも「文学を志す者は、まず数学を得意としなければならない」というのがあったように記憶している。

寅彦の随筆集「触媒」の中に収録されている「喫煙四十年」に、次の一節がある。

——伯林でも電車の内は禁煙であったが、車掌台は喫煙者の為に解放されていた。日本の電車ではこれが許されない。いつか須田町で乗換えたときに、気まぐれに葉巻を買って吸付けたばかりに電車を棄権して、日本橋まで歩いてしまった。夏目先生にその話をしたら早速当時書いていた小説の中の点景材料に使われた。須永という余り香ばしからぬ役割の作中人物の所業として、それが後世に伝わることになってしまった。——

ところが、漱石の「彼岸過迄」の中の「停留所」という一章を見ると、このことが次のように書かれている。

敬太郎が二階から玄関へ下りた時は、例の女下駄がもう見えなかった。表へ出るや否や、何ういう料簡か彼はすぐ一軒の煙草屋へ飛込んだ。そうして、そこから一本の葉巻をくわえて出て来た。それを吹かしながら、須田町まで来て、電車に乗ろうとする途端に、喫煙御断りという社則を思い出したので、また万世橋の方へ歩いて行つた。彼は本郷の下宿へ帰るまで、この葉巻を持たず積りで、ゆっくりゆっくり足を運ばせながら、なお須永のことを考えた。——

これによると、寅彦のいうような須永の所業ではなく、敬太郎の所業であるけれども、寅彦の体験談を漱石が題材としたことは、その内容の一致からして確実である。

漱石の「彼岸過迄」は、明治四五年に書かれたものであり、寅彦の「喫煙四十年」は昭和九年に書かれたものである関係から、幾分追憶の誤謬があったものと思われる。このことは、記憶の正確性に比類のない寅彦としては、まことに珍しいことであるといえよう。

寅彦が漱石の作品にあらわれた例は、以上につきることではない。最初にふれておいたように、寅彦が隨筆の中で、自から証言しているいわば確実なもののみをとりあげてみたのである。

小宮豊隆の名著「夏目漱石」によれば、「漱石は、自分が最も愛する者、自分が最もよく知っている者、自分に最も近い者の中に、最もみにくいものを沢山発見する時、愛し、知り、近いという理由で、それを見て見ぬふりをするというような、だらしない真似はできなかったのである」と述べられており、また和辻哲郎の名著「偶像再興」の中にも、「先生は『人間』を愛した。しかし不正なるもの不純なるものに対しては、毫も仮借するところがなかった。その意味で先生の愛には『私』がなかった。」という叙述がある。漱石の「愛」は「即天去私」的であり、まことにきびしかったといわなければならない。けれども、寅彦にとっては「先生というものの存在が心の糧となるのであった」とさえ感ぜられたのである。

明治四一年七月三〇日付の鈴木三重吉あての手紙の中で、漱石は近頃は「大分ずるくなって、何ぞという手近なものを種にしようというくせがでてきた」と書いている。

漱石が、このように自分の作品の中に、「手近なもの」として寅彦のことをとり入れているということと、また小説のモデルにされることなどは、おそらく最も好まなかったであろうと思われる寅彦